

国内事例
in Japan

2

都市と農村の縁結び／ 日本生活協同組合連合会 生活クラブ生協

安心して心豊かに暮らせる地域は、どのようにつくられるのだろうか。1951年に設立された日本生活協同組合（以下、日本生協連）は、組合員2,800万人の日本最大の消費者組織である。組合員は安心して安全な暮らしの実現のために「普段の暮らし」に関わる様々な事業を運営している。ここに、豊かな地域づくりのヒントを探る。

食から始まる 豊かな地域づくりへの挑戦

日本生協連が取組む事業の1つに「産直」という取組がある。産直とは生産者と消費者が直接商品を売買する流通形式だが、生協は、物だけでなく「都市と農村の暮らしをつなぐ仕組み」と捉え、取組を発展させている。生産者と組合員が集う全国産直研究交流会の2018年のテーマは「持続する地域・農業・産直」だった。「実際、農村が抱えている不安は“地域がなくなるかもしれない”ということ」と、日本生協連 産直グループの菅野氏は言う。その不安

に、日本生協連が向き合わずして「生協産直」はあり得なかったのである。生協産直が地域に長く寄り添う1つの事例を紹介する。鳥海山に降り積もった雪が豊富な沢水となり水田を潤す山形県遊佐町は、農業を基軸に栄えてきたが、近年は少子高齢化や農業の担い手不足など問題を抱えていた。2013年、遊佐町で生活クラブとJA庄内みどり、遊佐町が「地域農業と日本の食料を守り、持続可能な社会と地域を発展させる共同宣言」を締結した。農業や食というテーマを越えた、「持続可能な地域づくり」への3者共同の挑戦であった。

都市と農村の暮らしを結ぶ 生協産直

遊佐町との3者連携の始まりは1971年、まだ食糧管理制度の時代であった。米の不透明な流通に不満を抱く消費者と生活クラブが出会い、米の直接提携がスタートした。それから40年間、遊佐町を取り巻く様々な社会問題に3者は共に解決への道を探ってきた。不断のパートナーシップによる信頼関係の先に生まれた共同宣言だった。共同宣言の後、3つの部会（まちづくり、環境、農業振興）を設けた。まちづくり部会企画の移住者向け体験ツアーは、遊佐町の環境や公的サービスをアピールするものではなく、遊佐町に暮らす人との交流であり、遊佐町の農業を知ることにある。遊佐町の移住者は、2012年の1組2人から2016年に



生産者から米の説明を聞く

は22組60人となった。その全てが、町内農家ネットワークの中で農業に従事している。生協との提携関係を通じて都市の人は農村の農作物とつながり、体験ツアーで産地を訪れ、農村の人や暮らしとつながる。そして、関わり合いの中でその地域を好きになる。まるで、人と人、暮らしと暮らしの「縁結び」のよう。「産直というのは、都市だけがよくても、農村だけがよくてもダメ、両方が幸せでないと」と、菅野氏は話す。生協産直がめざす豊かな地域づくりは、都市・農村の各地域がその特性を生かし、自然・社会・経済の健全な相互関係を補完しあうその先にある。行政区を越えた豊かな地域の実現は、全国に組合員をもち、地域に深くありながら全国的な視野をもつ日本生協連らしい取組ではないだろうか。今年、日本生協連の環境推進部は地域コミュニティ担当と一体化し、サステナビリティ推進部となった。暮らしに寄り添う不断の取組は、これまで以上に豊かな地域づくりへのリーダーシップを発揮していく。

[聞き手：つな環編集部]



2013年、遊佐町で生活クラブとJA庄内みどり、遊佐町が「地域農業と日本の食料を守り、持続可能な社会と地域を発展させる共同宣言」を締結